
[成果情報名] 新規カラシナ「博多蕾菜」の特性

[要約] 「博多蕾菜」の商品性の高い収穫物は1次および2次側芽である。早期抽台株の発生が多い年は2次側芽が多い。冬季低温な中山間地域よりも温暖な平坦地域で多収であり、10月上中旬定植の2月収穫が多収である。

[キーワード] カラシナ、側芽、博多蕾菜、早期抽台

[担当部署] 八女分場・中山間地作物チーム

[連絡先] 0943-42-0292

[対象作目] 野菜

[専門項目] 栽培

[成果分類] 生理生態

[背景・ねらい]

本県はカラシナの生産が盛んで、三池高菜、かつお菜、山潮菜が特産として知られている。これらはいずれも葉を食用とする葉用カラシナである。

一方、近年、我が国初の芽用カラシナが本県に導入され、「博多蕾菜」と命名して産地化が図られている。短縮肥厚した側芽を特徴的な商品とし、和・洋・中華食の高級食材として評価が高い。しかし、側芽肥厚などの生理生態的な特性は十分明らかになっておらず、栽培方法も未確立である。

そこで、「博多蕾菜」の生理生態的な特性を明らかにして、本県における栽培適地選定と作型確立に資する。

[成果の内容・特徴]

1. 商品性の高い側芽は、主茎に着生する1次側芽と、主茎下部から発生した1次側茎に着生する2次側芽である(図1)。両者の発生割合は年によって異なり、早期抽台株の発生が多い年は2次側芽が多い(図2)。
2. 1次・2次側芽の発生割合に関わりなく、黒木町(標高140m)など冬季低温な中山間地域よりも柳川市(標高0~5m)などの温暖な平坦地域で多収である(図2)。収量が多いのは9月上中旬播種の10月上中旬定植、2月収穫である(図2、図3)。これよりも早い作型では、ウィルス症と軟腐病による生育不良株や欠株が多発して収量が低い(データ略)。

[成果の活用面・留意点]

1. 供試系統は、(株)福岡園芸が平成19年11月に品種登録出願した。
2. 農薬では、「野菜類」および「なばな類」に登録のある殺虫剤、殺菌剤が使用できる。また、作付け後に使用できる除草剤は登録されていない(平成20年12月現在)。

[具体的データ]

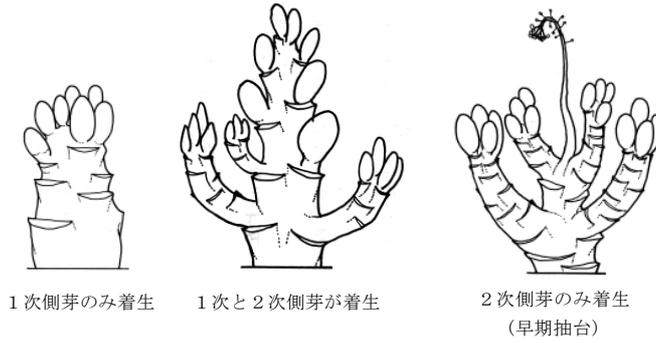


図1 典型的な「博多蕾菜」株のタイプ

注) 摘葉した姿を模式的に示す。

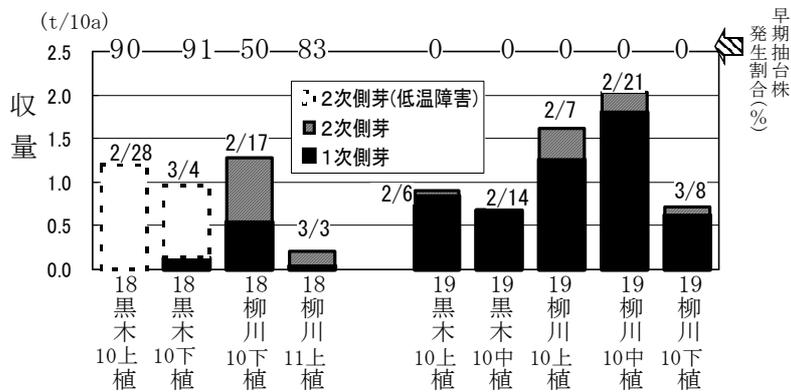


図2 「博多蕾菜」の栽培地および播種時期と側芽収量

(平成18~19年度)

- 注) 1. いずれも10a当たり2,500株定植の露地栽培。
- 2. 株ごとに適期収穫し、収量は商品性のある3g以上の側芽について算出。
- 3. 各棒グラフの下の標記は、年度・栽培地・定植時期。
- 4. 各棒グラフ上の日付は平均収穫日。
- 5. 18年度黒木の2次側芽は、低温障害が発生して商品性が低い。



図3 収量が多い「博多蕾菜」の作型

注) ○: 播種 △: 定植 ▨: 収穫

[その他]

研究課題名：新地域特産カラシ菜の栽培技術の確立
 予算区分：県特（サラダ食野菜開発事業）
 研究期間：平成19年度(平成17~19年)
 研究担当者：執行明久、成山秀樹、柴戸靖志、月時和隆